

項目	観点	教科書名			
		新しい国語(2・東書)	現代の国語(15・三省堂)	伝え合う言葉 中学国語(17・教出)	国語(38・光村)
1 学習指導要領の教科の目標を達成するために取り扱う内容の選択について	○国語で正確に理解し、適切に表現する資質・能力を育成するために、どのように配慮されているか。	○教材ごとに、身に付けたい資質・能力を「言葉の力」として明示しており、三年間で系統的に言葉の力が定着するように工夫されている。 ○「漢字道場」「日本語探検隊」「文法の窓」を小単元として年間を通じて取り扱っており、語彙力向上、基礎基本の定着が図られる。 ○「てびき」より単元の目標や学習の流れを提示し、身に付けたい資質・能力の定着が図られるよう配慮している。 ○「文学の学び」や「情報と論理の学び」により、学習の焦点が絞りやすくなっている。 ○読書教材を扱った後に「ビブリオバトル」、俳句の学習を行った後に「句会」を取り扱うなど、学習したことを適切に表現する活動を行うことで、生きた知識にしていこうという工夫がなされている。	○各単元で学ばせたい「思考の方法」に関連するチャート(図)を提示することで、複数の読み取り方・解決方法を学ぶことができる。 ○文章構成が一目で捉えやすいように、見開きで表示する教材を設けている。 ○冒頭の領域別教材一覧で、各教材の目標と対応した「つけたい力」を詳しく観点ごとに明記し、○の表示により重点項目が明確に示してある。 ○「学びの道しるべ」において、各教材の目標や思考の方法、学習の流れを示すことで、見直しをもつて学習に取り組み、ねらいに即した学習過程が展開できるよう配慮されている。 ○「読み方を学ぼう」では、文章の様々な読み方を例を示しながら取り上げることで、読解力につながる。	○探究的な学びのサイクルが単元の中で示されているため、生徒が自らの学びを自覚しやすいのではないかと。 ○「学びナビ」により、他の単元で身に付けた力、本単元で身に付ける力が明確になっている。特に「書くこと」においては、題材の選定から、共有までをスモールステップで身に付けていくことができる。△学年が上がるにつれ、「学びナビ」が簡素化されている。 ○1年「少年の日の思い出」において、挿絵はすべて情景のみ、「国語で正確に理解し」という点において、情報が多すぎなくて良い。	○「語彙ブック」が挟み込まれており、生徒が、学習や生活の中で主体的に活用し、使用語彙を増やし、語感を磨けるような工夫がされている。 ○「語彙ブック」として表現語彙がまとめられていることで、「書くこと」「読むこと」の両方に生かせる。また、系統立てて語彙が示されているため、発達の段階に合わせて、使用語彙が増え、語感が磨かれることが期待できる。 ○思考のレッスン「具体と抽象」「根拠の吟味」など、資質・能力を育成する上での重要なポイントが分かりやすく掲載されている。 ○「読むこと」「書くこと」「話す・聞く」全ての領域が、「学びへの扉」「学びのカギ」のキーワードで統一されている。 ○「情報×SDGs」が各学年にあり、著作権、情報モラルなど、これからの時代に合った課題を取り上げているため、実生活に生きる力を育むことができるのではないかと。 ○写真、棒グラフ、イラスト、表等、説明的文章の中に多様な資料を複数取り入れたり、比較読みできるように3つの文章を扱ったりするなど工夫が見られる。必要な情報と文章を結びつけて考える力の育成につながる。
2 内容の程度及び取扱いについて	主體的・対話的で深い学びの実現のために、個別最適な学びと協働的な学びの設定についてどのような工夫が見られるか。	○話すこと・聞くことの教材において、例えば「プレゼンテーション 説得力のある提案をしよう」や「リンクマップによる話し合い」では、問題解決的な言語活動が多く設けられているため、生徒同士が助言し合ったり議論を通して考えを深めたり互いの考えを生かして結論をまとめるたりするなど協働して学びを深められる。 ○各教材の初めにキャラクターに吹き出しが付けられ生徒目線の問いかけが示されているため、主体的な学びに繋がる。 ○他教科等の学習内容と関連する題材が積極的に取り上げられ、関連があることを示す教科関連マークが付されており、教科横断的なカリキュラム・マネジメントに配慮されている。 ○「読書への招待」の2年生の「メディアの垣根を越えて」では、小説と実写映画、アニメーション映画や小説と漫画、アニメーション映画を比較できるような題材となっており、生徒の多様な興味に応えられるような配慮がなされている。	○「対話」を通して自分の考えを深めることができる。「読み方を学ぼう」によって図式化されることで読み手による解釈の違いが明確になり目には見えない考えが共有しやすくなる。 ○2年「創作文」では、数種の創作コースから興味・関心に応じて選ぶため、個別最適な学びが実現できる。また、作品例も掲載されているため、指導しやすいく。	○各領域の学習活動の中に、「書くこと」や「みちしるべ」など協働して学習する活動が適宜設定されており、相互に課題を交換しながら、主體的・対話的で深い学びが導かれるよう工夫されている。 ○「話すこと・聞くこと・書くこと」では、学習の流れと重点を冒頭に示すことで、生徒の主体的な学びができるように配慮されている。 ○各教材の本文の前に「学びナビ」を配置し、その教材で「何を」「どのように」学ぶかを示し、生徒が主体的に学習に取り組めるよう配慮している。また、単元末に目標に対応した「振り返り」のコーナーを設けることにより、生徒自身が「主体的に学習に取り組む態度」について自己評価できるように工夫されている。 ▲巻末の「言葉と文法」の文法の部分は、上下2段になっており、図表も少ないので、見づらく分かりづらい。	○各教材の後に「学びへの扉」があり、学習の流れが図式化されており、学習の見直しをもち、主体的に課題解決を行えるよう配慮されている。また、学習の流れの中に、「個→集団(ペア・グループ・クラス)→個」という流れが設定されており、対話的に理解や考えを深める工夫がされている。 ○「学びへの扉」では、振り返りの視点が明らかになっている。特に「つなぐ」という観点があることで、探究的な学びのサイクルが意識しやすい。 ○巻末の「学びを深める」の文法を解説する部分があり、図を用いながら分かり易く整理されている。 ○各教材の後に「学びのカギ」があり、この教材で身につける資質・能力(学習のポイント)を焦点化・可視化されており、生徒が主体的に課題解決を図る過程で、資質・能力を習得できるよう配慮されている。
3 内容の配列・分量	○単元の構成や教材の配列には、どのような特色があるか。	○「てびき」として「見通す→つかむ→読み深める→考えをもつ→振り返る」が提示されているため指導者と生徒が学びのイメージを共有できる。 ○各学年の巻頭折込に「未来を考えるための九つのテーマ」が示されており、1年間の最後にはその中から特定のテーマを取り上げた教材が設定されている。これにより、各学年で1年間の集大成としてこれまでに身に付けた「言葉の力」を生かしながら考えを深めることができる。 ○振り返りのキーワードが提示されていることで学びがぶれない。 ○前回の教科書の文法学習は、導入が終わったあと巻末の文法解説がまとめて掲載されているページに飛ばなくてはならなかったが、今回の改定では、導入と文法解説が連続したページとなっており、より見やすくなっている。	○「読むこと」と「書くこと」の学習が関連づけられている。 ○単元を通してスモールステップで学習ができる構成になっている。例えば、1年「わかりやすく伝える」では、最初に「ペンギンの防寒着」を通して説明文の基本構造を捉えた後、「クジラの飲み水」を通して段落相互の関係等に着目して文章の内容を捉える構造になっている。そして、最後に読んだことを生かしてレポートを書くという学びの流れが明確になっている。	○「学びのチャレンジ」で、様々な文章や資料を読みながら、考える力や目的に応じて判断する力、表現する力を高めていくための問題を設けている点は評価できる。但し、1年分を集中的に配列するよりも、教材と関連付けて配列した方が継続的に学習を行えると考え。 ▲巻頭の「言葉の地図」が5ページにわたって書かれているが、ページが分かれているために、全体像を見通しにくい。	○巻頭の「学習の見直しをもとう」が見開きになっており、1年間に学ぶ教材全体を系列立てて、見通しが立てられる。 ○1年生の教科書のP14～P20に「言葉に出会うために」というコーナーが設けてあり、「音読の仕方」や「ノートのまとめ方」「辞書の引き方」「メモの取り方」がまとめてある。学習への取り組み方が分かり易く説明されており、国語の学習方法に関するガイダンスについて指導しやすいく。 ○古典教材の配列に工夫がみられる。2年では「枕草子」、3年では「論語」を第1章に配置し、古典教材の分散化を図り、各学年の一時期に集中的に学ぶのではなく、3年間の中で継続的に学ぶことができるよう配慮されている。
4 表記・体裁・資料	○用語や写真、動画・音声やアニメーション等のコンテンツなどの使用上の便宜については、どのような工夫が見られるか。	○二次元コードから、関連資料や動画、資料等400以上のコンテンツにアクセスが可能である。QRコンテンツから文法ゲームを取り入れており、学習意欲の向上や個別最適な学習への工夫をしている。 ○独自に開発した教科書用書体を採用しており、文字の大きさや配色、フォントの使い分け等、情報を視覚的に理解するための工夫が見られる。 ○登場するキャラクターが、ジェンダーレスな制服、左利きなど多様な個性をもっている。 ○紙の教科書から、QRコンテンツに移すことでページ数が削減でき、生徒の身体的負担の軽減が期待される。 ▲「言葉を広げよう」が、QRコンテンツ内に入ってしまったため、語彙調べに関してスピード感や手軽さが失われることが懸念される。	○二次元コードから、解説動画や補助教材が参照でき、多様な学びにつながるよう工夫されている。 ○独自に開発した教科書用書体、上下段のレイアウト、図解を採用し、ユニバーサルデザインの観点も取り入れた書面構成になっている。	○文字のフォントは他社と比べるとやや大きめ。国語に抵抗感のある生徒にとっては取り組みやすいかと。 ○カラーのページが豊富だが、カラーユニバーサルデザインへの配慮がされた紙面構成となっている。 ○指導書のデジタル化 ▲4社の中では一番厚みがある。 ○学習に必要な用語(索引)	○ICT活用のヒント、二次元コード一覧など、ICT活用の道しるべとなるものが集約されているので、必要なときにすぐに使うことができる。 ○全国学力・学習状況調査でも導入予定のCBT(コンピューター使用の試験)がQRコンテンツに導入されており、コンピューターを使用した試験の対策として活用できる。 ○古典作品において、巻物で表された年表があることで、時代背景や作品の理解につながる。 ○古典等、見開きのカラー資料が豊富。 ○「語彙ブック」が、他のページより少し小さな紙で入っているため、特別感がある。また、見付けやすい。